

ジェンダーとナショナリズムとして不利を被っているのはつねに難しい関係を切り結んできた。とくに今年を振り返る際に無視できない、「従軍慰安婦」の言説をめぐると、「女性」と「民族」の恥をめぐると、問題化を可能にさせた言説にも、「女性」や「民族」への侮辱という同様の概念がある。今の私たちに求められているのは、ジェンダーとナショナリズムをめぐると政治を緻密に思考することなのではないか。

ジェンダーとナショナリズム

緻密に思考することが求められる

千田 有 紀

「女性」は「排除された他者」ナショナリズムとして不利を被っている。マイノリティであるが故に、「被書者」としてのわたしたちを構築する際に重要な役割を果たしているという分析は興味深い。「女性」を利用することによって、「わたしたち」は「被書者」として、愛国者になる権利をばく奪されている、という主張が可能になる訳である。ネットウオチのこの論理は、荒唐無稽ではあるが、近年のネットの

現した。ナチスが政権を握るやいなや、参政権を失い、専門職から締め出され、大学入學にも人数制限が設けられ、生物学的に優秀な国民を産むことを期待されるようになる。あつという間に消えてしまった、同時代的に世界で発生した、しかし時代のあだ花のような彼女たちによるテキストを読むみ解く劣作である。

『BL進化論』ポイズラフが社会を動かす(溝口彰子、太田出版)は、男性同士のホモセクシュアルの物語(BL)を読むことによって、自分自身がレスビアンとしての主体になりえたという著者によるポイズラフ漫画や小説の分析である。とくに「ホモフォ

読まれる著作に収録されたことは、喜ばしい。越智博美・河野真太郎編著による『ジェンダーにおける「承認」と「再分配」』(彩流社)は、承認と再分配にかかわる論文が収録されたアンソロジーである。ナンシー・フレイザーやジュディス・バトラの間でたたかわされた、承認と再分配をめぐると論争にはどのような意味があったのかを理論的に再考するだけではなく、現代の、また過去の日本、アメリカ、ヨーロッパにおける豊富な事例の読み解きによって、承認と再分配の政治、新自由主義について考えさせる一冊となっている。

堀江有里による『レスビアン・アイデンティティーズ』(洛北出版)は、アイデンティティの限界が語られる現代において、「アイデンティティーズ」という複数をを用いながら、アイデンティティの可能性を考へ抜こうとする著作である。理論的でありながら、実践的、体験的な筆致である。装も美しく、電子書籍の時代に、紙面の構成を含めて「本」と呼ばれるのだという紙の書籍のよさも再確認させてくれる本であった。(せんだ・ゆき氏 武蔵



利用を背景とした女性愛国者の出現という現象を読み解く上でも重要である。彼女たち自身もまた、このような論理を巧みに利用しつつ、「主体」となるようにしているとは間違いない。

『「女の子」という運動』ワイマール共和国末期のモダンガール(田丸理砂、春風社)は、ワイマール共和国の末期に出現した「新しい女」の運動に焦点をあ

て、消費社会を背景に、結婚や出産といった従来の女性役割からはみ出す、都市で働く「新しい女」が出



大学教授・女性学専攻